

村中璃子氏のブログ中の医師の発言内容について

「村中璃子氏のブログ (<http://www.rikomuranaka.com/news/1003> 平成30年2月2日現在) 中に、同氏がジョン・マドックス賞を受賞した際の授賞式で、以下のように発言したと記載されています。

"In Japan, three thousand lives and ten thousand wombs are lost to cervical cancer every year. When I gave a talk at my old school Hokkaido University, I was asked by a **young gynecologist, "How many more wombs do we have to dig out?"** In Japan, a class action lawsuit is said to take ten years, and it seems that no politician make a decision to restart the HPV vaccination until the lawsuit is over. If we have to wait ten years for any hope of HPV vaccination starting again, how many more wombs will Japanese gynecologists have to dig out? **The answer is "A hundred thousand"**. Please imagine all those wombs gone. Please imagine the women who owned them, the children who were born from them and lost their mother, and the children who were supposed to be born from them." (<https://note.mu/rikomuranaka/n/nd26c1eaacb3e> 平成30年2月2日現在)

「日本では毎年、3000の命と1万の子宮が失われている。母校北海道大学で講演をした際、ひとりの若い産婦人科医が私にこう尋ねた。——僕たちだけあとどのくらい子宮を掘り続ければいいんですか。子宮を「掘る」、すなわち子宮を摘出するという意味だ。日本では国家賠償請求訴訟が終わるまでには10年を要すると言われる。また、訴訟が終わるまで、接種再開を決断できる首相や官僚は出ないだろうとも言われる。よって、もし子宮頸がんワクチン接種再開まであと10年を待つ必要があるとすれば、日本人の産婦人科医は、いったいいくつの子宮を掘りだせばいいのだろうか。答えは「10万個」だ。掘り出した10万個の子宮を想像してほしい。その持ち主である女性たち、そこから生まれ母を失った子どもたちを。そこから生まれてくるはずだった子どもたちを。」 (<https://note.mu/rikomuranaka/n/n64eb122ac396> 平成30年2月2日現在)

上記の北海道大学での講演とは、平成29年8月21日に北海道大学医学部の小児科学教室が開催した村中氏の講演であり、「ひとりの若い産婦人科医」とは、村中氏と質疑応答をした北海道大学の一医師のことです。

しかしながら、その質疑応答の際に、この医師は「取る」と発言したのであり、「掘る (dig out) 」とは述べておりません。「掘る」と発言したという村中氏の指摘は、事実と異なります。

「掘る」というのは、医師が女性への敬意を欠いて臓器を扱っている、と誤解されかねない表現です。この点について、当法人が何もコメントをしなければ、医師と当法人

の名誉と信用が毀損されるおそれがあるため、本 HP でこれを指摘させていただきます。」

一般社団法人 WIND

代表理事 櫻木範明（北海道大学名誉教授）